学習会　～気づいていく時間～

2014 年度、介護従事者による高齢者虐待の相談・通報件数は 1120 件、うち虐待と判断されたものは 300 件と前年を大きく上回りました。高齢者虐待防止法が施行されて以来、増加の一途です(2005 年の 5 倍強)。

虐待の判断は難しいし、施設の評判が悪化する事を恐れ通報件数はほんの一部と思われます。私の経験では心身の疲労が極限になれば必ず暴力的になるか、抑うつ的になるし、私たち自身が粗末に扱われれば、より弱い存在を粗末に扱うものです。

ところで、この 7 月の津久井やまゆり園の元職員による事件は、私達と決して無縁ではないテーマがいくつも見えて、やりきれない思いがありました。

そんな中で、10 月 13、27 日に、暮らしネット・えんでも「虐待を見つめてみよう」と“鼻めがねと言う暴力～虐待の芽はすぐそこに（林田俊弘著 2016）”をテキストに学習会が持たれました。筆者は練馬区の NPO 法人ミニケアホーム「きみさんち」理事長で、多角的な事業を展開している認知症ケアの専門家です。

10 月 13 日の夜に私は参加しました。仕事を終えて、グループホームえん、デイホームえん、多機能ホームまどかの 20 人ほどの職員がグループリビングえんの森のアトリエに集まり、夜食のおにぎりを頬張った後、学習会が始まりました。テキストに触発され、仲間と語り合っていくうちに他人事と思っていた「虐待」は自分自身にも思い当たる、と気づいていく時間でした。

◆他人事のように感じていたけど、無自覚のうちに事実として自分にもある。夜勤など疲れていると、利用者さんを急がせてしまう事がありました。
◆自分が時間に追われているとき、早くしなきゃと焦って、利用者さんから「もういいです。出て行ってください」と言われてしまいました。
◆自分が「まずはスピード」を重視しているときは、危険な兆候なんですね。
◆自分が先回りして利用者さんの自由を奪っていることもある。歩行の不安定な利用者さんが立ち上がるだけで、「トイレですか」とか。利用者さんはとても不愉快ではないかしら。職員同士で率直に同僚の間違いを伝えられるような関係を創っていきたいですね。

次々に自分の日頃の、語りきれない想いを伝え合う場ともなりました。最後に、「いろいろな思い、悩み、相談事等を互いに表現できる職場環境が、虐待の芽を